
1977 札幌私立政外高等学校 - 春編 -

加納 季里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1977 札幌私立政外高等学校 - 春編 -

【Nコード】

N7228Q

【作者名】

加納 季里

【あらすじ】

あれほど嫌だった私立高校にも慣れてきた主人公と仲間達がゴールデンウィークをどう過ごすのか 春編です。

私立高校だっていいじゃねーか（前書き）

相変わらず読みずらくすいません。とにかく楽しんでいただければ幸いです。

私立高校だつていいじゃね〜か

4月も後半になり学校にも大分慣れてきた。

友達も、砂

間、鹿田に加え増えてきた。

根っからのお

調子者

朝井 幸広：

ロッ

クを何よりも愛し、ギターが好きでしようがないんだが、ギターを弾けない

佐々木

向十：

博識でバイク命だが、見た目はホームレス

柏田 義安：

ヤンキー

に懂れてる

皆本 正一：

天才か秀才にしか見えないが実際は大した事ない

小野

沢 健一：

実家は農家だが将来は漁師になりたい

吉岡 孝士：

人をネタにして喜ぶのが至上の幸福

牛田 孝和：

強いヤツに媚びを売る

佐藤雄二：

常にチヨロチヨロ

してる

江藤 聡：

こいつらが誰とは

なく、休憩時間、昼食時間、放課後に俺の周りにやって来る。た

まに全員揃うこともある。話題といえば勉強以外。女の子ネタ

が尽きる日は無い。後は音楽、テレビ、遊び、暴走族やヤンキー

ネタが殆どだが、学校内だけではなく、登・下校の時も同じ様な話

題で、普通なら飽きそうなもんだが不思議と飽きることが無い。

これが男子校というもんなんだろうか。

そ

して一番の話題は、あと5日に迫ったゴールデンウィークをどう過ごすか。一泊二日で誰かの家に集まろうかという漠然とした話し

はしたが、進展はしていなかった。休憩時間に朝井が小走り

で「なあ〜、どうする〜？」と俺にしがみつく格好でやって来た。

「わかったから、まず首から手を離せ！！」「いやあ〜もうすぐ

休みだしよ〜」「話しが合つてね〜だろ！！」「やっと朝井の

手を振り解いた。コイツはファッションには結構気を使うヤツなんだが、髪型にこだわりがなく、毎日といっていいくらい髪にゴミが付いている。目は大きく二重だが、クチビルが異常に分厚く色黒だ。昔、プロレスラーのジャイアント馬場のライバルでボボ・ブラジルという黒人のレスラーがいたのだが、その模倣で、プロレス漫画のタイガーマスクの中に、ポポ・アフリカというレスラーがいた。単にクチビルの分厚さが似てるということで、ポポ朝井と呼ばれていた。名付けたのは俺だ。「やっぱり集まりたいよね。」

珍しく砂間がニヤ〜とせず話してきた。「でも集まるっても、来れないヤツ引いても10人近くいるぞ。前に砂間の部屋広いつて言つてたけど、そんだけ入るか？」砂間に尋ねた。「ウン、一応12畳だから入ると思うけど。」「なんだ、じゃあ大丈夫だろ、砂間の家に決定でいいだろ?!」「僕はいいけど。」「ヨシッ!!砂間の家で決定なっ!!ポポっ、みんなに伝えといてなっ!!集合場所とか時間とかあとで決めるから!!」「ミド〜っ!!ポポはやめろっ!!」朝井はポポが気に入っていないようだ。ゴールデンウィークは砂間の家に集まることになった。俺が仕切ってしまった。放課後、集合場所と時間を話し合った。

「まず、来れないヤツ引いて6人だな。」相変わらず仕切りは俺だ。「せつかく集まるんだから女の子いた方がいいんだけどなあ。」早速、鹿田の女の子ネタが始まった。

「そりゃあミド〜に頼んだ方がはえ〜よ、なあ〜ミド〜く〜ん〜」牛田が気色の悪い

声をフル回転させている。「別にいいけど、ゴールデンウィーク直前だし予定組んでる子が多いと思うから2〜3人だと思うぞ。」「いいっ!!全っ然いいっ!!さっすがミド〜!!」

更に牛田の声が高くなっている。牛田は髪型は演歌歌手の渥美二郎、顔は橋幸夫にそっくりで呼び名はみんなウツシ〜とかウシ造と呼んでいるが、ちよつとした口喧嘩になるとベコ造と呼ばれている。東北の方で牛をベコと呼ぶのにちなんだようだが、ナイスな

ネーミングだと思う。」「でも、半分以上余っちゃうから、コ
〜ジユ〜、なんかかなんない？」 佐々木に尋ねた。

「あ〜、2人ぐらいなら、まあなんとか。」 佐々木は名前
が変わっていて、「向十」と書いて「こうじゅう」と読む。なんで
も親父さんが時代劇好きで家系図に向十という侍がいたらしく、そ
のまま名前にしたらしい。ロックとギターが好きで、ギタリストの
チャーに似ているのが本人も満足らしいが、ギターは弾けない。自
分の部屋にあるギターはオブジェになっているらしい。 「十
分、十分。だけど、お前らもナンパとか努力はしろよ。」 「わか
ってるって！！」 朝井が調子のいい返事をしてきた。そして、ゴ
ールデンウィーク、5月2日朝10時に札幌駅前に集合した。砂間
の家は札幌と小樽の中間にあり、此处から1時間程かかるというこ
とだった。

来たメンバーは俺と砂
間の他に鹿田、佐々木、朝井、牛田の6人と女の子4人の10人。
結構な人数だ。 あれほどやかましく女の子を呼べと騒いでいた鹿
田、牛田、朝井は、慣れていないのか緊張しているのか、借りてき
た猫のように大人しい。「しかだ〜、せつかく俺とコージユ〜が女
の子連れて来たのに挨拶とか、なんか一言くらい喋れよ。」

「え〜っ、俺だけ〜！！」 「ウ
ッシーとポポ、飲み物買いに行つてんだからお前しかいね〜だろ。
」「いやあ〜そうだけどよあ〜。」 「んじゃ、今4人とも連
れてくつから、話すこと考えとけよ。」 早速、佐々木の方

へ行き、連れて来た女の子2人に軽く声をかけた。 「
こんにちわ、コージユ〜の友達の御藤です。」 「あつ〜！ど、
どうも、はじめましてえ〜！！石井 ひかりですう〜！！」

「こんにちわあ〜！！内田香澄です〜！！」
2人共中々にカワイイ。「コージユ〜って結構イイ趣味
してんなあ〜。」 などと思いながら 「ホラっ、あそこにお地藏さ
んみたい人居るでしょ。鹿田っていうんだけど、女の子に免疫が無
いから、すぐ緊張しちゃうんだけど、石井さんと内田さん見て、も

つとガツチガチになつてんだよね。」「ええっ！！ウチらを見てえっ！！なんでですかあ？！」「そりや

あ2人共、スングクカワイイからでしょう。」

「エっっヤダっっ！！」 「モウっっ！！

御藤さんてウマいですねえっ！！」「ウマくない、ウマくない、他のヤツだつて絶対そう思つてるよ！！。しよっちゅうナンパとかされるんじゃない？」「全然ですよっ！！ねえっ！！」「

ウンっ！！たまゝに、イイなあゝって思う人がいても振り向いてもくれないしい。」「御藤さんつて彼女とかいるんですかあ？！」「友達とかならいるんだけど、彼女はいないね。彼氏もないけど。」「エっっ！！ヤダっっ！！」「ウケるっ！！」2人共上機嫌のようでキャツキャツいつている。掴みはOKの感じだったので「

そんでね、アイツ緊張して喋らないと思うから、軽々でイイから話しかけてもらえるかなあ？」「ハイっ！！」「いいですよっ！！」「じゃあ次はこっちだな。」「俺が連れて来た子達の方へ足を運ぶと」「ちよつとあゝ、カズヒロあゝ、随分楽しそうだよねえ。」「ホント、ひっさしぶりに会つたのにウチらには全然だもんね。」「この展開はマズい。」「なあゝに言つてんだよ、友達が連れて来た子達だから、楽しませてあげなきゃ、友達の顔潰れっちゃうだろ。」「またあゝ、ホントはどっちに気があるんじゃないの？」「ハアッ？友達の連れて来るコ目当てだったら、弘美と雪は呼ばねえよ。」「そうなのお？」「あつたり前だろっ！！ホラッ、あそこにいる頭マルガリータのヤツいるだろ、それと今、飲み物買いに行つてる2人が、俺の知つてる中でとびつきりカワイイ女の子連れて来てくれつてウルサイから弘美と雪に声かけたんだから、変に勘繰るなっちゅの！！」「頭、マルガリータつて、ヤダあゝおつかしい！！」なんとか持ち直したようだ。この流れに乗り、佐々木と俺は女の子達を連れ、鹿田の方へ行つた。

鹿田は本物のお地蔵さんを凌ぐ勢いで固まっていた。今ならコイツでクギを打てるかもしれない。」「コ

ンニチわっ！！カズヒロの彼女候補の 坂野 雪ですっ！！ヨロシクねっ！！」 鹿田は口が半開きになったまま、目が点になっていた。 雪は名前通り肌が白く、髪はロングで顔が小さく目鼻立ちが整い、すれ違った人は男女問わず必ずといっていいくらい振り返る程の美少女なのだが、それ以上に、誰とでも話し、裏表のない性格と気使いのできるところが俺は気に入っていた。ただ、親と上手くいっておらず高校も一週間で辞めてしまい今は家でブラブラしている。 「チョッツとおっ！！ユキいっ！！何それっ！！あたしもただけどっ！！」まゝた始まった。このコ達は大親友なんだが、俺の事になると、とたんに敵対心丸出しになる。弘美の肩に手を置き小声で「ひ・ろ・み、わかってるから気にすんなって。」言った途端に機嫌が良くなった。

弘美、楽しくやろうねっ！！」

さっすが弘美、わかっ

てんなあゝと思いつながら感謝した。 弘美は雪とは逆にボーイッシュで小麦色の肌にショートヘア、スポーツ万能の上、高校ではテニス部と茶道部に入りクラス委員までやっている。中学の時、全学年でアンケートをした所、恋人にしたいNo.1は雪だったが奥さんにしたいNo.1は弘美だった。だからこそ、俺は2人を連れて来た。 鹿田に目をやると、佐々木の連れて来た子達も挨拶してるのだが、当の鹿田が全く話せていない。そこに、朝井と牛田が戻って来た。 「買ってきたぞっ！！」朝井と牛田がパンパンのビニール袋を両手にぶら下げ自慢げに俺の前に差し出した。 「結構時間かかったなゝ、なゝに買ってきたゝ？」佐々木が尋ねると 朝井が「いやあゝ、食べる物もあつた方がいいかなゝと思つてよゝ。なあ、ウツシー。」 牛田は「だから、チョつと買い過ぎだつて言つたべゝ。」と朝井の方を横目で見ている。 朝井の持っている袋の中を見ると、おにぎりやパンやお菓子やらでぎっしりになっている。何故か、サンマの蒲焼きの缶詰があつた。不思議に思つたので朝井に「なんでサンマの蒲焼き入ってる？」と尋ねると「嫌いか？」と言つてきた。「いやいや、そうじゃなくてよ、缶詰どゝすん

のよ？ 缶切りとかいるべ？」 「砂間ん家に缶切りぐらい、あるべや。」 「そりゃあ砂間ん家に缶切りぐらいあるだろうけど、だったら砂間ん家の近くで買った方がいいべや。」 「アツ・・・」 朝井は、やっと気づいたらしい。 「ウツシー、変だと思わんかつたんか？」 「いや、俺、サンマの缶詰あんまり食べないから。」

牛田の袋を見ると、サバの缶詰が入っていた。 コイツ

らの頭の中を、完全スキャンしたと思った。 そんなこんなで砂間の家に到着し砂間の部屋へ。 「もうすぐお昼だし天気もいいし、海近いから海行つてご飯食べる？」 砂間にしてはグッドアイ

デアだと思った。 「せつかく来たんだし、そうすつか？！」 みんなに尋ねると大賛成だったので、準備をし海に向かった。 砂間はフォークギターを持ってきた。 「砂間、ギター弾くのか？」

「鹿田が、持ってたなら目立つからアピールしろってウルサイから」 「この中でギターを弾けるのは俺だけだった。 砂間に教えた

りはしていたが、まだ、そんなに上手く弾けなかった。 結局、鹿田は俺に弾いてくれとか言うんだろ。 全く自分の手を汚さないヤツだ。

鹿田はプラスチックのバットとボールを持ち、スポーツ大好き少女の弘美と満足気に少しずつだが話しているようだ。 「

まあ、楽しんでるんならいいか。」 と思っているうち、海に着いた。 早速シートを敷き、みんなで昼ご飯を食べた。 シーズン前の海水浴場なので、人影もまばらだ。 砂間が写真を撮ろうと張り切っているので記念撮影の感じで集合写真を撮った。 そのあと、4対4に別れバレーボールをやることになった。 審判が1人いる。 そうなると1人余ってしまう。 審判は牛田、砂間は見学者になった。 みんな砂間の存在を忘れているかのように熱中した。 そのう

ち砂間はギターを弾きだし、何かを口ずさんでいたが、みんなが、交代しようとして声をかけてくれないので、しびれをきらしたかのようにな。 「そろそろ誰か交代する？」 と言ってきたが、誰も交代しなかった。 普段でも不気味で怖い顔の砂間が、もつとパワーアップし、仁王立ちで海に向かい、ギターをジャンジャン鳴らしながら 「ま

「つたくもうっつ！！　　いったいなんなのさっつ！！」　　シーズ
ン前の海水浴場に砂間の叫びが響いていた。　　みんな一瞬、砂間の
方を見たが、ギターの練習だと思い、気にせずバレーボールを続け
た。
　　砂間は叫び続けていた。
夏
編へ続く

私立高校だっというじゃねーか（後書き）

夏編をまとめています。 ネタが多いので迷っていますが、楽しめるようガンバります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7228q/>

1977 札幌私立政外高等学校 - 春編 -

2011年2月7日05時25分発行